

「教えるための日本語文法」

第1回

これは本です。

これは本ですか。

これは何ですか。

山田 あき子

[nihongo@yu-yu-jin.com](mailto:nihongo@yu-yu-jin.com)

検討する課題：「これは本です」「これは本ですか」「これは何ですか」の使い方

提案したいこと：指導している表現方法・指導した表現方法は使うべき機会に使わせるようにしたい

まず、私達の言語生活の中でこの3つの表現方法「これは本です。これは本ですか。これは何ですか」をどのように使っているのか見ていきましょう。

本屋さんで目の前にいる人に「これは本です」と言われたらどんな感じがしますか。

あるいは、パン屋さんで「これはレーズンブレッドです」と言われた場合と違いはありますか。

「これは本です」には違和感があり、「これはレーズンブレッドです」はしっくりくるのではないのでしょうか。単に本とレーズンブレッドが入れ替わっただけですが、その違いは一体どうして起こるのでしょうか。

「この彫像、何か持っていますね」「ええ、これは本です」といったようなやりとりであれば、違和感をぜんぜん感じないでしょう。なぜ、このような場合には「これは本です」が使えるのかというと、本と判別できない人に[本]と教えてあげる格好になっているからです。何の文脈もなく、ただ「これは本です」と言われた場合に違和感を感じるのは、大人の生活の中で改めて[本]と教える場合がほとんどなく、それが使われる機会をすぐには思い出しにくい点にあります。レーズンブレッドの場合は、パンにはレーズンブレッド、クルミパン、食パン、バケットなど色々な種類があり、「これはレーズンブレッドです」と聞く機会を容易に想像できるからです。すなわち、「あるある、こんなこと」と容易に思い出すことができますから、違和感を感じないのです。

「これは本です」は「本」だということを知らない、判断できない人に教えてあげるのに用いられる表現方法だと言えます。ですから、周知のこと、少なくとも話し手と聞き手双方にとって当たり前のことには使わないのです。

「これは本ですか」はどうでしょうか。

これもしっくりこないのではないのでしょうか。しかし、これを「これはレーズンブレッドですか」とすると、違和感はなくなると思いますが、どうでしょうか。その違いはどこから生まれてくるのかと言うと、自分で確実に判断ができるかできないかという点です。[本]は、ほとんどの場合、見ればだれでもわかります。しかし、レーズンブレッドの場合は、切ってあればその必要はないかも知れませんが、パンには種類があり、見ただけではわからず確認したいということがありうるからです。

確認する必要があるってこの表現方法「これは本です」は使われるのであり、話し手・聞き手双方にとって当たり前のモノについては使わないのです。

それでは「これは何ですか」はどうでしょうか。

これは「何だかわからない。何だか知らない」ということを伝える表現方法です。ですから、[本]を指差して「これは何ですか」「これは本です」というやりとりはまずないでしょう。それに対し「これは何ですか」「これはレーズンブレッドです」ならありうるでしょう。

同型の表現方法でも違和感がある場合とない場合があるというのは、言葉は必要があるときに、適切に使われることを意味します。

ここで、この3つの「これは本です。これは本ですか。これは何ですか」の表現方法で伝えられることを確認しておきましょう。

Aこれは本です。目の前にあるモノをホンと呼ぶことを伝える・目の前にあるモノはホンと呼ばれるモノであることを伝える：知っている内容を伝える

Bこれは本ですか。目の前にあるモノをホンと言っていいかどうかを確認したい/自分自身の知識が正しいかどうか確認したいことを伝える：確認したいということを伝える

Cこれは何ですか。目の前にあるモノをどう呼んだらいいかわからないから教えてほしいことを伝える：名称を知らないことを伝える。

(注 「目の前にある」は「これは」が伝えていることですが、今回は検討課題にしません。)

それでは、日本語指導の場ではどうしているのでしょうか。

「これは本です」「これは何ですか」「これは本ですか」が取り上げられるのは本当に最初の方ですから、学習者は本も知らなければ、レーズンブレッドも知らないといった段階にいます。ですから、以下のようなステップを踏みたくになります。

第1段階 「本」・「レーズンブレッド」・・・と語を教える 繰り返し言わせる

第2段階 「これは本です」「これはレーズンブレッドです」・・・と「これは」を付して繰り返し言わせる

第3段階 「これは本ですか」「はい、そうです」「これはレーズンブレッドですか」「いいえ、レーズンブレッドではありません。クルミパンです」・・・はい・いいえの応答練習として言わせる

第4段階 「これは何ですか」「本です」「これは何ですか」「レーズンブレッドです」・・・本あるいはレーズンブレッドの位置に疑問代名詞「何」を入れて、応答練習をさせる。

このような展開ではそれぞれの表現方法の使い方がわからせられないように思います。

各段階「でどうしてこう言う」のかを学習者に分らせられません。学習者が持つ疑問は「なぜ?」「どうして?」ではないでしょうか。

第1段階：名称を教えてもらっていることはわかるでしょう。

第2段階：第1段階で名称を知ったわけですから、改めて「これは本です」と言うことが理解してもらいにくい。「これは」が付加されていますから、新しい表現方法ではありますが、[本]を言わせられていることには違いがありませんから、なぜ同じことを言わせられているのかという疑問が生じるのではないのでしょうか。

第3段階：なぜ、もう知っていることを何遍も聞かれなければならないのかと学習者は思うのではないのでしょうか。「これは本ですか」は判然としない・自信が持てない場合に使う表現方法です。もう何回も本と言ってきましたから、確認をする必要はありません。ですから、本来の使い方をわかせることはできません。

第4段階：「これは何ですか」も、本もレーズンブレッドも散々言わせられていますから、既に知っているのに尋ねられていることになります。これも本来の使い方ではありません。

このような展開ですと、それぞれの表現方法の使い方をわからせることはできず、先にも触れましたが「なぜ?」「どうして?」という疑問が残ってしまうのではないのでしょうか。

言葉（例 本 レーズンブレッド）を知らなければ応えられないではないかと反論があるかもしれません。しかし、逆に、知らない・教えて欲しいという想いを学習者が持ったところに「これは何ですか」と言わせ、「これは本です」「これはレーズンブレッドです」と応じてあげれば、学習者は想いを遂げたことになります。この想いを遂げることが確実に表現方法の使い方を身につけていく重要な点です。

「言いたいこと」が言えるようになった・「伝えたいこと」が伝えられるようになったという想いが大事ですから、授業は「言いたいこと」「伝えたいこと」から始め、「言いたいこと」「伝えたいこと」で展開する授業を目指したいものと思っています。

補足 このような使い方A「これは本です」B「これは本ですか」C「これは何ですか」を身につけさせるには、モノの名称だけで授業を展開するのでは楽しいクラスインタラクションにはなりません。ですから本の位置にナイロン・ウール・コットン（素材）・塩・砂糖・醤油・ソース（調味料）などを用いることで、素材、調味料などを話題にして使わせていけば、何回も同じことを言わせられている、何回も聞かれていると、学習者も思うことはないでしょう。学習者自身もABCの3つの使い方を確認し、追認しながらクラスインタラクションに参加してくれるはずです。その後、私の本、自動車の本、日本の車などと表現できるようになると、所有者のこと、本の内容のこと、生産地のことなどを話題にしてここでの表現方法を使う機会を作ることができます。「復習をしましょう」と言うのではなく、自然に使う必要に迫ることで定着の度合いが高まっていきます。